



ASLE-Japan / 文学・環境研究会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

June 1, 1995, No. 2

Western Literature Association Conference に参加して

高田 賢一 (青山学院大学)

雨雲が途切れたかと思うと急に機体が左に旋回を始め、湖水をかすめるようにして着陸態勢に入る。カリフォルニアのサンノゼから90分の飛行、途中で機内放送の指示にしたがって右手に目を向けると、うっすらと雪に被われたヨセミテの岩山が視界に入り、左にレイク・タホが見えたのがほんの少し前のことだったのに、いまはグレイト・ソルト・レイクの上を飛んでいる。飛行場は目の前にせまってくる。さあ着陸だとすぐ下に滑走路が目に入ったとたん、地上数メートルでいきなり機体は再上昇を始め機内は一瞬騒然となる。前方に小型機があるため急上昇をしたとの放送が、騒ぎが収まる頃に流れてくる。Welcome to Salt Lake City、ここは神様に守られている中西部の清潔で美しい都市である。

10月5-8日、ユタ大学と大学近くのホテルを会場にして、Western Literature Associationの第29回年次大会が開催された。この学会は名前の通り西部を背景とするアメリカ文学を研究対象とする研究者の集まりだが、西部の意味は広く、ミシシッピ以西全域を指しているとのことである。ASLE-USのScott Slovic氏の誘いもあり、また、いま滞在しているカリフォルニア大学サンタクルーズ校でnature writingでPh.D論文を書こうとしている院生で、岩登りに青春をかけるさわやかな小説*Lighting Out*で作家としてデビューしたばかりのDaniel Duaneからも声をかけられたのをいい機会に、参加を思い立ったのだった。

会は300人強の人が参集して初日の夕刻より始まり、Terry Tempest Williamsの自作朗読で幕を閉じることになったが、四日間の間にシンポジウムを含めて200にのぼるほどの発表が目白押しにあり、その多くはネイチャーライティングに関わるものだった。発表の合間には、“Edward Abbey: A Voice in the Wilderness”という興味深いドキュメンタリー・ビデオの上映もある。また、地元の作家であるWilliams、メイン・ゲストとしてやってきた小説家のJames Welch、それからnature writerとして注目されているWilliam Ketrtridge、小説*McAn Spirit*で脚光を浴びた詩人・小説家、nature writerでもあるLinda Hoganの自作朗読会も催され、盛況であった。

WelchとHoganはやや押さえた声で、Williamsはドラマティックな語り口で、Ketrtridgeは西部男のイメージそのままにぶっきらぼうな調子で朗読をして、それぞれの作品を読みたくさせる印象を残す。

発表の内容はMark TwainやWilla Catherといった名声の確立した作家・作品を取り上げるものがある一方、現在活躍中の作家たちに向けられたものが圧倒的に多かった。その多くは学会の性格上、西部という地域を反映してかネイティヴ・アメリカン作家であり、メキシコとの国境が喚起するボーダーというトピックに関わるラテンアメリカ系作家、もしくは現在“Trilogy of Border”の二作目*The Crossing*を発表したばかりのCormac McCarthyなどである。

参加者の関心が高かったのは、既成・既存の作家・作品を新たな視点からとらえ直そうとするシンポジウム形式の発表だった。会場で知り合ったASLE-USのメンバーの中には、この学会の意義は新しい問題提起に接することが出来るところにある、完成原稿ではなく、文字通りのwork in progress、試論が聞けるのがいいと語る人がいたが、その言葉を裏付けるようなプログラム内容だった。

わたしが聞いたのはそのごく一部だが、eco-feminismの立場から女性のフロンティア体験を読み直そうとする“Women Writing Frontier Experience”、新しい地方主義文学の可能性を問う“Re-Imagining Regionalism”、ネイティヴ・アメリカン文学の基底に自然の存在を見る“Native American Writing and the Environment”、地理上の境界を精神・文化の境界と結びつけようとする“Borders and Boundaries: Mary Austin and Helen Hunt Jackson”、それからecocriticismとはなにかを問いかける分科会“Definishing Ecocritical Theory and Practice”がASLE-US主催で行われた。これらはすべてシンポジウムであり、ジョークをまじえた発表の後にはたっぷり時間をかけた質疑応答がなされた。それがまた新たな問題提起になっていた。

ASLEの分科会から感じ取れたことは、従来の文学が人間と世界・社会の関係、あるいは人間そのものに焦点を当てるのに対して、nature writingは人間と宇宙の関係、また、自然の一部としての人間、作品の単なる背景ではなく、人間の存在に絶えず働きかけてくるものとして自然を見直そうとする研究者としての自覚であり、立場であった。むろん個人の間には完全な一致があるわけではない。それどころか、自分はecocriticではないがと、ちょっと場違いと思えるような発言をして爆笑を巻きおこす報告者がいるかと思えば、ecocriticism推進の発言をしておきながら結びのところでまるでpunch lineのように、

でもわたしの立場は旧態依然ですと、新たな笑いの渦を生み出す発表者、ふざけていると怒る人など、聞くだけでなく、見るだけで十分におもしろい内容になっていた。その熱気は、今まさにネイチャーライティングという形をとった文学の新たな読みが始まろうとしていると感じさせるにたるものだった。

最終日の午後には、山中へのハイキングとグレイト・ソルト・レイクにある野生動物の保護区、Antelope島への自然観察のツアーが催された。Williamsがガイド役をするというので、三台のバスに分乗してこのバッファローやコヨーテが棲むという島へのツアーに加わったが、快晴に恵まれたツアーは楽しいものだった。草原にたむろするバッファローの群れ、塩分の強い湖に生きる小海老を狙う鳥たちの羽音、湖面に影を落とす小山。どこを見てもカメラのレンズを向けたくなる風景が一面に広がっているが、同行のレンジャーの説明では、この動物たちの楽園も日々環境汚染に脅かされているとのことだった。

アメリカの広大さ、自然の豊かさは海沿いの中都市サンタ・クルーズに着いて以来、いつも意識の中にあったが、この自然

との隣接感都市に暮らす多くの日本人には無縁のものかもしれない。それに対して、アメリカでは自然は身近な存在といえる。そのためだろうか、汚染され、開発されていく自然を守ろうとする必要感がアメリカの市民の日常の意識の一部となっているのは。

今回のWestern Literature Association大会はカナダで開催されるが、今年の6月9-11日にはASLEとして最初の大会がColorado State Universityで開かれる。これには日本からの参加を望む声があり、現在、野田研一、大神田丈二、伊藤詔子、山里勝巳、西村頼男、Bruce Allen諸氏と私が参加を表明している。300人規模の集まりを予定しているとのことだが、研究発表、John Elder, Scott Russel Sandersら5人ほどの作家による朗読、ロッキーマウンテンへのツアーなど、企画は盛り沢山になっている。

(ASEL-J副代表、本年3月までカリフォルニア大学サンタクルーズ校にて在外研究)

Thoughts on Nature Writing

by
Terry Tempest Williams

March 31, 1995

Kanazawa, Japan

It is a great pleasure and privilege to be able to meet with you and share some of my thoughts with you regarding literature of the environment, what we are collectively calling "nature writing." No country has a deeper tradition of this kind of literature than Japan.

But first, I must thank you for your extraordinary kindness in inviting me to be here with you in Japan. I would like to thank the Yomiuri Shinbun newspaper: Shoriki-san, Asano-san; and most especially, Okajima-san, who I believe is a kindred spirit. I appreciate their vision and belief in this Symposium. I would like to acknowledge Professor Ken Noda and thank him along with the Association for the Study of Literature and Environment (ASLE) for organizing this gathering.

I have had many guides in Tokyo and Kanazawa. My sister-in-law, Ann Tempest and I appreciate the generosity of Masahiko Narita, Tomoko Nakagawa, Komatu-san, and Masami Yuki. I would also like to thank those translating English into Japanese, particularly, Keiko Murasaki.

I feel most grateful to Michiyo Ishii, my friend and translator of *Refuge*. Her sensitivity to language has enchanted my own. And I am grateful for Sato-san for publishing *Refuge* in his series of American Nature Writing.

And I believe our mutual friend, Scott Slovic's spirit is with us. He sends his warmest regards to all.

Today, I would like to honor and acknowledge the writings of Hino-san, I so appreciate being able to meet him and have

the opportunity to talk with him about nature and culture, what we have lost in regards to our relationship with the natural world and what we must try to regain, retrieve.

Yesterday, he shared one of his essays with me, a short story, let us call it "creative non-fiction," entitled, "The Rectory." It is about a man, Hino-san himself, perhaps, who discovers he has cancer and leaves the urbanization of Tokyo because his body desires water. He travels to the country. As he makes his way down the cliff to the river, Hino-san writes:

I mutter to myself that I am happy to have had the courage to come here, I close my eyes again, dizzy, with the full light of the setting sun, feeling its rays to my inner core. For some time, I remain thus motionless on the boulder at the water's edge. With a changeless rhythm, the roar of the torrent recedes and returns, now suddenly becoming the sound of my own blood, coursing through veins and arteries. . . .

I do not know of a more powerful example of nature writing.

This is your tradition. Waka. Haiku. Japanese poetry. Ki-no-Tsurayuki writes, "Japanese poetry has its seeds in the human heart and countless words as leaves. It is a literature that moves heaven and earth without strain, touches the emotions of unseen spirits and gods creates harmony between men and women, and calms the hearts of fierce warriors."

The idea, the genre of nature writing is not new. It is very, very old, basic and essential to our human souls.

附記：本号のニュースレターの編集がほぼ終了したところにテリー・テンペスト・ウィリアムス女史からの原稿が送られてきた。次号に全文を掲載するつもりであるが、女史が滞日の折にお世話になった方々への謝意が述べられてあったので最初の三分の一ほどを掲載することにした。(編集部)

N・スコット・ママディの『夜明けの家』(1968)は全4章から成る小説である。舞台はサンディエゴ溪谷およびロスアンジェルスが中心で、時代設定としては1945年から52年までが中核をなす。作者が登場人物の個人の意識を描写する過程で、時代が遡行することは当然である。しかし、この作品で作者は個人の意識の流れを追求しているのではない。「個人」が生まれ育ってきた集団(ここではカイオワ族)の民話や歴史を今一度、想起し、カイオワ族の男として蘇生する若者の姿を描いている。

主人公アベル(青年男子)は父親が誰か判然とせず、現在は祖父と二人きりで生活している。アルコールに触れるまでは病気にかかったことのないアベルだが、祭りの折、それを口にしたいきおいで、白人と喧嘩をする。その結果、彼は白人をナイフで刺し、死に到らせる。アベルの殺人罪の立証をめざして白人の流儀にそって調書が取られる。しかしながら、彼には殺人を犯したという意識はない。刑期を終えた途端に彼はロスアンジェルスという大都会で白人流の生活に順応しなければならない。彼はベン・ベナリーという保留地生活を経験した若者の世話になるが、すでに白人世界に順応している“インディアン”たちはアベルが面倒をおこすと予測している。インディアンたちがたむろして飲食する店には全米インディアン救済ミッションのトサマー祭司や白人の悪徳警官も出入りしている。アベルはありついた流れ作業の仕事にも順応できず、保留地から脱出したミリーという若いインディアン女性の“ヒモ”になり、アルコールに浸るようになる。アベル、ベン・ベナリー、ミリーの3人の若者は保留地での生活を回想したりして互いに慰めあう。そして、やがてアベルは自分の土地に戻ってゆく。

『夜明けの走者』というタイトルのついた最終章では、アベルの祖父は死の床に横たわっている。話は最終章の現在から過去に遡って、祖父が熊狩りを完成することで一人前の男子と認められた頃のことを物語られる。この語りによって作者は都会生活に別れを告げたアベルは祖父と同じ道を辿ることを示している。すなわち、アベルは(若い日の)祖父ということになる。祖父がなくなると、アベルは部族の儀式にそって祖父を弔い、その後カトリックの神父にその死を伝える。今も昔ながらの部族の宗教的儀式が残っている証拠である。

この小説をユニークなものにしているのは第2章で物語られるカイオワ族の伝承である。昔、カイオワ族が飢えに苦しんでいたとき、子供が飢えに苦しむ姿を見て食料を探しにでかけた男がいた。4日目に男が衰弱した状態で溪谷にやってくると雷鳴があり、声が聞こえてきた。「おまえは何を探しているのか」と。男のそばに立っていたモノにはシカの脚がついていた。男が事情を説明すると、眼前のモノは言った。

「私をつれてゆけ。必要なものは何でもやろう」と。男がそれをもって帰り、カイオワ族は飢えから救われた。このモノはタイミと呼ばれ、以後カイオワ族の守り神となった。この

ような伝承を全インディアン救済ミッションのトサマー祭司は会衆に聞かせる。

ここで注意すべきは、トサマー祭司は個人としては聖人からはほど遠く、白人社会に同化している他のインディアンたちと同じく世俗的である点である。しかし、彼はインディアンの伝統的儀式—例えばペイオーテ崇拜—をとり行うことで、白人中心の大都会で生きる仲間たちの指導者の役割を果たす。部族の伝統を継承する人間はキリスト教的な意味で聖人である必要はないというのが作者の考えのようである。このようなトサマー祭司がカイオワ族の伝承をアベルに伝えることで、アベルが自分の土地へ戻ってゆく契機をつくっている。

ママディは『コロンビア合衆国文学史』(1988)に、「ネイティブ・ヴォイス」という標題のもとで、先住民の手になる文学について書いている。その中で、彼はコトバと文学というものには、本来、宗教性が付着していると主張している。このさい、文学は物語、神話、歌をさす。彼はまた、書きものの出現でコトバに対するわれわれの感受性は低下したのではないかと疑問を投げかけているが、この点、トサマー祭司の説教も同一の線上にある。「白人はコトバを希薄にし、増殖してしまった。……白人はおそらくコトバによって滅亡することであろう。」

この『夜明けの家』が完成する前後の執筆事情もママディの文学世界を理解するうえでは看過できない。彼はまず最初に、うゑに紹介したカイオワ族の伝承をまとめ、また、祖母にまつわる文章も記し、発表した。この祖母はオクラホマのレイニ・マウンテンという円丘を望むところで生涯を終えたが、ママディは祖母の死後、その地を訪れた。この事実は『夜明けの家』ではトサマー祭司が「レイニ・マウンテンへの道」と題して行う説教へと続いている。さらに、ママディは1969年には、『レイニ・マウンテンへの道』という独立した書物を出版した。彼はここでは、カイオワ族の伝承、ゴースト・ダンスの研究で有名なJ・ムーニからの引用文、祖母の思い出などをないまぜている。

『夜明けの家』がピューリッツァー賞を受賞したこと自体、アメリカ文学界におけるひとつの出来事といえよう。黒人文学やユダヤ人文学は論じられても先住民の文学は忘却されていたときに、アメリカ文学の正典は何かという問いに一石を投じたことになる。ママディの後、ジェラルド・ヴィゼナー、ジェームズ・ウエルチ、レスリー・マーモン・シルコー、ルイーザ・アードリックなどの先住民作家が続出している。

N. Scott Momaday,

House Made of Dawn. (Harper & Row, 1968)

Columbia Literary History of the United States. (Columbia University Press, 1988)

N・スコット・ママディの文学
— 『夜明けの家』を中心に —

西村 頼男
(阪南大学)

シラバス紹介1

広島大学

教育科目：総合科目

授業科目：文化と環境

開設単位数：2

担当教官：(実施責任者) 伊藤詔子

授業の形式：講義

開設期：1

授業の目的：エコロジカル・クライシスの叫ばれるなか、世界の森林や生命の宝庫と言われる湿地や海は今どうなっているのか。これまで文明とどう関わってきたか。世界の山や湖の風景はこれまでどのような美学と文学を生み出してきたのか。又アメリカの原野や砂漠は、どのような文化パラダイムを生み出し今日に至っているのか。そして都市という環境はいかなる文化を育んできたのか。文系理系及び英米教官も加わり環境のグローバルな視点と意識を啓発する。

授業の内容・方法：

(第1週) 伊藤詔子 (アメリカ文学研究)	序にかえて
(第2週) 成定薫 (科学史)	世界の環境観の変遷
(第3週) ピーター・ゴールズベリィ (ギリシャ哲学)	環境を哲学する
(第4週) 大山茂之 (英ロマン派研究)	ロマン派の詩人たちと環境
(第5週) 根平邦人 (植物系統学)	世界の森林
(第6週) トマス・ダブス (英ドラマ研究)	シェイクスピアの『嵐』とアメリカ自然中心主義
(第7週) 福岡義隆 (大気環境学)	文学と環境風土
(第8週) 堀越孝雄 (微生物生態学)	陸上植物と菌類の共進化
(第9週) 要田圭治 (英小説研究)	都市環境とイギリス小説
(第10週) 中越信和 (景観生態学・自然保護学)	湿地と文化
(第11週) クリストファー・シュライナー (英米文学批評)	都市環境とアメリカ・ポストモダン小説
(第12週) 早瀬光司 (地球科学)	大陸移動と人間の文化
(第13週) 吉田純子 (児童文学)	女・子ども・自然
(第14週) 伊藤詔子	地球生物学とアメリカネイチャーライティング

本年度は環境への学際的アプローチの序論として位置づける。各論的展開については来年度以降継続して実施する予定である。

テキスト、参考書等：①クライブ・ボンディング『緑の世界史』上下(朝日選書) ②沼田真『環境保護という思想』(岩波) ③ジョン・パークン『森と文明』(晶文社) ④R・F・ナッシュ『自然の権利——環境倫理の文明史』(TBSブリタニカ) ⑤アルド・レオポルド『野生のうたが聞こえる』(森林書房)

成績評価の方法：レポートによる

履修上の注意、受講条件等：上記参考書のほか、各教官が推薦する図書を読み、文化と環境のテーマに関心の高い学生の受講を期待する。

(日)～29日(火)の3日間の日程で、山梨県清里の清泉寮で開催され、このほど新しく設けられたネイチャーライティング分科会の講師として、野田研一(金沢大学)、山里勝己(琉球大学)両氏が招かれ、環境教育にたずさわるフォーラム・メンバーと活潑な意見交換の場を持つことができました。さらに素晴らしいことに、今回のミーティングの基調講演者には、*The Norton Book of Nature Writing* (1990)の編者であり、自身も優れたネイチャーライターである、ミドルベリー・カレッジ教授ジョン・エルダー(John Elder)氏が招かれました。"Sea-

sons of American Nature Writing"と題された講演は、アメリカ文学を歴史的に俯瞰しながらネイチャーライティングの現在を測る充実した内容で、かつ日本文学に造詣の深い氏ならではの言及も会場の関心を惹きました。

『英語青年』2月号

ネイチャーライティングを特集し、巻頭にスコット・スロヴィック(Scott Slovic, ASLE-U.S.会長、サウスウェスト・テキサス州立大)氏の講演を再録しているほか、渡辺利雄氏(東大)による解題、岡島成行(読売新聞)、山里勝

己、上岡克己(高知大学)、伊藤詔子(広島大学)、野田研一各氏による「私の1冊」という小論が配されています。

『山と溪谷』2月号

特別企画と題して、「アメリカ文学と自然保護」という特集が組まれています。記事は加藤則芳「森の聖人ジョン・ミューア」、芦澤一洋「ネイチャー・ライティングの流れ」の2編。

『アーヴィングを読んだ日』

会員である芦澤一洋氏の『アーヴィン

(次頁に続く)

シラバス紹介2

高知大学

授業科目：アメリカ文化論

担当教官：上岡克己

授業種別：講義

開設学期：通年

単 位：4単位

対象学生：2回生以上

授業のキーワード：文学と環境

授業目標：アメリカのネイチャーライティングを通して、人間と自然の関係を問う。

授業計画：

1 American Nature Writing 入門 (1)	16 John Muir (1)
2 " (2)	17 " (2)
3 " (3)	18 " (3)
4 Rachel Carson (1)	19 Aldo Leopold (1)
5 " (2)	20 " (2)
6 Terry Tempest Williams (1)	21 " (3)
7 " (2)	22 Gary Snyder (1)
8 Richard Nelson	23 " (2)
9 イタチの世界 Annie Dillard	24 Edward Abbey (1)
10 鯨の世界 Robert Finch	25 " (2)
11 蛇の世界 Edward Abbey	26 ウィルダナーネスとアメリカ
12 Henry David Thoreau (1)	27 "
13 " (2)	28 自然の権利
14 " (3)	29 "
15 学期末試験	30 学期末試験

テキスト、参考書等：スロヴィック・野田編『自然という文化』（ミネルヴァ書房）

授業方法：講義と演習

成績評価の方法：平常成績、出席状況、期末試験

受講生へのメッセージ：環境問題に関心のある学生を歓迎する。

グを読んだ日—水と空の文学誌』（小沢書店）が刊行されました。芦澤氏を深く魅了した近代のネイチャーライター9人へのオマージュとなっています。なお、芦澤氏のご自身ネイチャーライターとして活躍中です。

『グローバルネット』52号

（財）「地球・人間環境フォーラム」発行の同誌が、「文学はどこまで環境を語れるか」という特集を組んでいます。上岡克己氏の「欧米文学に表れた環境思想」、野田研一氏の「ネイチャーライティング」という論考をはじめ、アメリカ、フランス、中国などの環境文学研究の現状が紹介されています。

教科書版ネイチャーライティング・アンソロジー

スコット・スロヴィック編著、生田省悟（金沢大）・大神田丈二（山梨学院大）・上岡克己・横田由理（広島中央女子短大）氏の共同注釈による英語テキスト *Worldly Words: An Anthology of American Nature Writing*（ふみくら書房）が刊行されました。12編の現代ネイチャーライティングが収められた、わが国初の本格的ネイチャーライティング・アンソロジーです。

九州アメリカ文学会

九州アメリカ文学セミナーが5月13日（土）、14日（日）の二日間にわ

たって開催されました。テーマは "American Literature and Natural Environment"。これにそって研究発表とシンポジウムが行われました。シンポジウムは伊藤詔子氏、野田研一氏、山里勝己氏の発題で行われました。詳細は次号のニューズレターで報告する予定ですが、事務局 〒810 福岡市中央区六本松 九州大学言語文化部内九州アメリカ文学会までお問い合わせ下さい。

日本環境教育学会第6回全国大会

5月13日（土）～14日（日）の二日間にわたって千葉県立中央博物館・県立青葉の森芸術文化ホールにおいて開催されました。今年はミニシンポジウム「環境教育における文学の可能性」と題して、ネイチャーライティングに関する分科会が設けられました。ASLE-Japanから、亀井浩次氏（環境教育学会会員、名古屋市立若宮商業高校）、大神田丈二、上岡克己両氏が講師として参加したほか、金沢大学の山本一氏（日本古典文学、金沢大学）が加わりました。ASLE-Japanの研究活動が環境教育とどのような接点を持ちうるか注目されます。

（9ページに続く）



報 告

1994年度秋季談話会を、10月9日(土)、19名のメンバーの参加を得て、名古屋外国語大学にて開催しました。岡島成行氏によるジョン・ミューア『はじめてのシエラの夏』、および上岡克己氏によるロバート・フィンチ「鯨のように」についての発題を柱に、大神田丈二氏の司会で進められました。内容は種々の都合により、若干変更されましたが、何よりも活潑な議論が収穫であったと思われま

す。『はじめてのシエラの夏』に関しては、ソローとの比較を通して、文学的な意味でのレヴェルの問題が提出される一方、行動者としてのミューアの特長も議論的となりました。「鯨のように」については、人間中心主義を越えようとする「生態系中心主義」のモチーフに共感的な議論が多く聞かれましたが、一方で他者としての自然の問題と絡むかたちで、他者としての女性がフィンチという



3月31日(金)に開催された読売新聞北陸支社、ASLE-Japan主催「環境と文学シンポジウム」と併せて、1994年度春季談話会を4月1日(土)に開催いたしました。なにぶん、二つの行事を重ね合わせるということで、準備作業に手間取り、ご連絡が直前となってしまいましたことお詫びします。

今回の談話会は参加15名。前回とうって変わって、1)日本のネイチャーライティング研究について、2)ASLE-Japan今後の課題、と主に運営面に関する課題の検討を行いました。1)については、ネイチャーライティング研究を「発信型」にし、国際的にも寄与するために、積極的に推進するという点で意見の一致が見られました。具体的には、ASLE-Japan内部に、「日本のネイチャーライティング研究」分科会を創設し、現在アメリカで準備が進んでいる *Literature and Environment* という本の執筆にASLE-Japanとして参加することを決定しました。実行委員として立候補していただいたところ、山里、高橋、外岡、生田、中村、高田、石井、木下、大神田、野田の各氏が名乗りを上げられましたので、実行委員会を結成いたしました。(この件に関しては別掲お知らせをご参照下さい。)

2)についてはニューズレター発行回数の増加、会費の納入状況報告、助成金獲得などが議論され、今後の検討課題として研究会を「学会」と改称する案などが提案されました。

「環境と文学シンポジウム」は、談話会の前日に、作家の日野啓三氏、アメリカからテリー・テンペスト・ウィリ

一九九四年度秋季談話会

作家によってどう描かれているのか、という興味深い疑問も提示されました。

活潑な議論の進行により、予定時間はあっというまに過ぎてしまいました。ASLE-Japanとしては初めての本格的な議論の場は、じつに心楽しい意見交換の場となりました。発題の岡島氏、上岡氏、司会の大神田氏のご協力に感謝します。とくに上岡氏は予定変更のため、急遽お願いしたにもかかわらず、快諾下さいました。

最後に、駆け出しの研究会のために会場を提供して下さいったばかりか、お茶やお菓子のお世話まで無償でして下さい、名古屋外国語大学の平善介先生を初め、塗木桂子先生、岡本恵子さんに心よりお礼申し上げます。とくに平先生の物心両面からのご支援には感謝のことばもありません。有り難うございました。なお、会場校との連絡や会場設営では土永孝氏にご尽力いただきました。



一九九四年度春季談話会および「環境と文学シンポジウム」

アムス(Terry Tempest Williams)女史を迎えて開催されました。一日だけのシンポジウムながら、ASLE-Japanのメンバーにとっては30日(木)午後の日野氏との懇談会、読売主催の歓迎夕食会に始まって、1日の談話会まで、まるで3日間にわたるワークショップのような刺激的なスケジュールでした。シンポジウムはウィリアムス氏の基調講演で始まりました。代表作 *Refuge: An Unnatural History of Family and Place* と *Coyote's Canyon* からの朗読を交えた講演は、ネイチャーライティングの特質を倫理的なレベルから政治的なレベルまで包括する「希望の文学」とする力強いものでした。なお、朗読では翻訳者の石井氏がうまく間合いをとりながら翻訳を朗読するという趣向が、聴衆の感動をさらに高めていました。

ディスカッションでは、日野啓三氏がウィリアムスの作品に与えられている creative nonfiction という概念に強い関心を表明し、フィクションとノンフィクションという既成の区分そのものを問い直す必要が語られました。ASLE-Japanからディスカッションに参加した山里氏はアメリカのネイチャーライティングの核にある「ウィルダネス」の主題をめぐる諸問題、野田氏は日本におけるネイチャーライティング受容の状況などを語られました。なお、シンポジウムに関しては読売新聞全国版で報告されたほか、地元北陸では連日その様子が伝えられました。「自然とは何か」というきわめて困難な問題をとらえた刺激的なシンポジウムでした。

第2回 中四国支部談話会

上記「文学と環境シンポジウム」基調講演及びシンポジウム講師として来日したTerry Tempest Williamsを迎えて、第2回中四国支部談話会を以下のように開催した。4月3日(日)午後3時から6時まで、広島大学総合科学部伊藤研究室に11名集まり、基調講演の要旨をきいたあと、女史の名短篇のうち、「Yucca」と「The Clan of One-Breasted Women」の朗読を傾聴した。続いて作品解釈、ネイチャーライティングの「poetics and politics」をめぐる白熱した議論が展開した。コロンビア大学、ユタ大学他で教鞭をとる女史によると、この談話会の議論はそのいずれよりも高水準なものであった。

朗読では見事な息遣いが生の形で鑑賞できたが、ナバホの民話からの引用や歌の部分等、原作者でなければ不可能な美しい節まわしは特に印象的であった。また、「The Clan of One-Breasted Women」の議論に際しては、広島に寄せる彼女の思いがひしひしと伝わり、批評家や学者にはない作品の内側からの解析に触れることもでき感銘が深かった。なお会のあと歓迎ディナーを持ち、9時近くまで彼女の作品の文化的背景や日米のネイチャーライティングの現状や展望について更に意見交換することができた。

ウィリアムス女史は2日間の滞広中、広大な西条キャンパ

ス、被爆建物として保存が決定した旧広島大学理学部の建物、日赤病院内の原爆関連病棟や研究施設、平和公園の原爆ドームと数多くの祈念碑、原爆資料館等を時間をかけて精力的に調査見学した。エクスカーションとして案内した宮島では、海にはり出した能舞台を含むシュラインを巡る一般のコースの他、山寺の大聖堂やピーター・マシーセンの『白豹』最終章を思い出すような瞑想窟、折から八分咲きを迎えた桜、それも水辺に立つ柳のようなしだれ桜等に見入り、日本のランドスケープを楽しんだ。対岸の宮島口から見た朱色の鳥居をさして「that small red in huge green and sea becomes heart of my heart」と評したのが印象的であった。女史が滞在したリーガ・ロイヤル・ホテルは広島城や原爆ドーム等市内を一望できる32階建ての建物で、戦後50年の広島への復興ぶりに瞠目されていた。

なお、談話会の参加者は以下のとおり。稲田勝彦、伊藤詔子、田中久男、クリストファー・シュライナー(以上広島大学)、オーエン・ブレディー(広島大フルブライト教官)、勝健一郎(安田女子大)、岡田和也(岡山大)、横田由理(広島中央女子短大)、信井裕子、岡崎里香、結城正美(以上広島大院生)。敬称略。

(報告・伊藤詔子)

九州支部報告

年明け早々にツルを見た。鹿児島県出水市に飛来する鶴は、一般に知られたタンチョウではなく、マナヅル、ナベヅルという灰色がかった、くすんだ色の鶴なのだが、一万羽近い群れが田畑におりている様子は、目にしたことのない異様な光景だった。

保護協会の一員でもあるMさんの民宿に泊めていただいていると、新春ということもあって、テレビ局や新聞社から取材や問い合わせが殺到していた。改めて、野鳥や野生動物の記事がマスコミにしめる位置の大きさに驚かされた。

こうした自然志向は、アウトドアや田舎暮らしの流行とあいまって、社会の思想の流れを形成しているように思われる。それはただ単に、山や森や海という外の自然ばかりではなく、自然食品とか自然治癒力とか、心理学的な「内なる自然」といった、本来の自然を再評価する動きと連動しているのかもしれない。

こうした社会の動きのなかで、昨年、「文学と環境」の日本支部が創設されたのも必然的な成り行きであったのだろう。そして、日本におけるネイチャーライティングの研究が、より広い社会性を獲得し、こうした自然再評価の先導的な役割を担うことを期待したいと思う。

九州支部における昨今の活動としては、小野和人氏の翻訳『メインの森』があらたに講談社学術文庫に納められたこと、山里勝己氏の「砂漠と人間——Mary Austinの*The Land of Little Rain*」が『英語青年』95年2月号に掲載されたこと、拙論「ヘンリー・ソローと日本の野鳥の会」を『フォリオa』(ふみくら書房)4号に掲載していただけるようになったこと、さらに、この5月九州アメリカ文学会のセミナーにおいて、「現代アメリカにおけるネイチャー・ライティング」というシンポジウムを計画し、野田研一、伊藤詔子、山里勝己、それに司会の橋口保夫の各氏を迎える予定にし、英文学会全国大会のシンポジウムへの確かな足がかりとしたいと考えている。

(報告・高橋勤)

附記：5月21、22日両日筑波大学で開催された日本英文学会第67回大会の最終日に行われたシンポジウム(「アメリカ的自然」をめぐる—Nature Writingとその背景—)において山里勝己氏がGary Snyderについて講演した。山里氏以外の司会・講師は、志村正雄、荒このみ、佐藤良明の3氏である。(編集部)

お 知 ら せ

「日本のネイチャーライティング研究」分科会について

さきの報告にありましたように、四月一日に開催された一九九四年度春季談話会において、表記分科会を創設する案が検討され、了承を得るとともに、実行委員会を結成いたしました。メンバーはその折りに希望された前記七名の方々が現在決まっておりますが、談話会に参加されなかった方々もたくさんいらっしゃるのでは、改めてこの欄を借りて公募したいと思っております。日本のネイチャーライティング研究に関心をお持ちの方々、ぜひ積極的にご参加下さい。まだ暫定的ですが、幹事として山里勝己氏（琉球大学）、副幹事として高橋勤氏（九州大学）をお願いする方針です。参加ご希望の方は、事務局までご連絡下さい。

Scott Slovic & Rick Bass 来日記念講演・談話会

- ◎日 時：8月4日（金）14時～17時
 - ◎場 所：広島市 国際ホテル会議場（参加者には地図を送ります）
(tel. 082-248-2323)
 - ◎プログラム：1. 会員研究報告（work in progress）
1人5分くらい／参加者全員
2. Scott Slovic氏講演
3. Rick Bass氏の作品reading and discussion
(参加者にはテキストを送ります)
 - ◎歓迎ディナー：同会場にて 17時～19時
 - ◎費 用：1人会費6000円くらい
 - ◎宿 泊：同ホテルにて6000円くらいより。（各自予約下さい）
 - ◎Excursion：8月5日（土）
平和公園、原爆資料館、縮景園、宮島、弥山登山等
- ◎参加希望者は葉書に住所・氏名・電話番号、それから5日のExcursionへの参加不参加（必ず書いて下さい）を記して、7月15日までに以下の住所までお送り下さい。

インターネット情報

Internetに"John Muir Exhibit"というJohn Muir関係のWorld Wide Web(WWW)ページがあります。NCSAMosaic, NetscapなどのWWW browserで読むことができます。URLは、

<http://ice.ucdavis.edu/JohnMuir/>

です。またSierra Clubのページもあり、こちらは

<http://www.sierraclub.org/>
につながつて読むことができます。

(土永孝、北海道大学)

ヘンリー・D・ソロー

晩年の手稿をまとめた*Faith in a Seed*の邦訳が、伊藤詔子氏（広島大学）により『森を読む一種子の翼に乗って』（宝島社）として刊行されました。新たなソローを読むことができるたのしみな作品です。

ウェンデル・ベリー

Standing by Words が『言葉と立場』（谷恵理子訳、マルジュ社）と題して邦訳刊行されています。ウェンデル・ベリーの単行本の翻訳刊行としては初の作品です。

ロバート・フィンチ

1981年に刊行された処女作*Common Ground: A Naturalist's Cape Cod*（ピューリッツァー賞ノンフィクション部門候補作）の翻訳が『ケープコッドの潮風』（村上清敏訳、松柏社）のタイトルで出版された。訳書の帯に謳われているように、「アメリカン・ネイチャーライティングの新たな旗手」ロバート・フィンチの「本邦初登場！」に注目すると共に、「ソローのケープ・コッドが現代に甦る」ことを期待したい。

事務局ニュース

◎お 願 い

- 1) 新会計年度に入りました。引き続き、1995年度会費—一般¥3000、学生¥2000—を同封の振替用紙にて納入して下さい。
- 2) 昨年度の会費納入状況は約56%でした。ニューズレターを刊行するのが精一杯という収入状況です。納入にご協力をお願いします。現在、事務局ではできるだけ広範な方々にニューズレターなど諸連絡ができるように、メイリングリストに基づいて書類をお送りしています。会員登録がまだの方は、至急手続きをお願いします。登録手続きはニューズレター末尾の用紙をお使い下さい。
- 3) 現在、メイリングリストに記載されている方の数は93名です。昨年度は、ニューズレター1号、「環境と文学シンポジウム」案内状、の2件をお送りしま

した。宛名書き不備その他の理由でお手元に届いていない場合には、ご連絡下さい。

- 4) 秋までに会員名簿を作成してお届けする予定です。氏名、住所、電話、勤務先の4項目を掲載しますが、公表を差し控えられたい事項がありましたら、ご連絡下さい。

◎ASLE-Japan今後の予定

- 1) 95年度秋季談話会を、アメリカ文学会の開催されます前後に、京都で開催します。詳細は追ってお知らせいたします。なお、この折り、総会を催し、決算報告などを行います。
- 2) ネイチャーライターであるリック・バス (Rick Bass) 氏とASLE-U.S.会長スコット・スロヴィック (Scott Slovic) 氏が、7月25日

(火)～8月8日(火)まで、2週間の予定で来日することとなりました。

『オーデュボン・マガジン』誌のための取材旅行が主目的ですが、ASLE-Japanとしてもお二人を迎えて「談話会」を催す準備を進めています。リック・バス氏は『心に野生を』(片岡真由美訳、白水社刊)で知られる、現在もっとも注目されているネイチャーライターで、森林保護運動などにも積極的に関与している活動家でもあり、さらに小説家としても注目されている若手です。

お二人の日程の詳細はまだ不明ですが、9ページのお知らせにありますように、8月4、5日両日の広島での講演会・談話会、そしてExcursionは決定しております。出来るだけ多くの会員諸氏の参加をお待ちしています。

from editorial Staff

■ニューズレターの2号がようやく発行の運びになりました。1号同様に、発行が大幅に送れましたことをまずお詫びしたいと思います。とりわけニューズレターを通じて研究会や講演会の開催などの告知をするつもりで早くに原稿を送って下さった方々のご期待に沿えなかったことはまことに申し訳なく思っております。また、それらの情報を含め、ASLE-Japanの活動状況や、内外のネイチャーライティングの研究動向、会員諸氏の研究活動や出版活動などの情報を迅速に、いわば旬のうちに会員諸氏にお届けできなかったことも残念でなりません。ともあれ、記事を送って頂いた皆様には改めてお礼を言わせて頂きます。ありがとうございました。■最近ASLE-U.S.のニューズレター最新号を見る機会がありました。ゲスト・エディターを招き「子

どもとネイチャーライティング」という特集を組んでいましたが、各頁に子どもの描いた動植物などの絵が巧に配置されいやが上にも読者の興味を惹く作りになっていました。ASLE-Japanでも将来、1人10枚程度のエッセイを何篇か集めて特集を組み、それをニューズレターの別冊という形で発行できたらどんなにすてきだろうと思いました。ネイチャーライティングについて大論文をものするのもよいでしょうが、私たちの研究会の性格から言っても、そのようなささやかな形でネイチャーライティングのすばらしさを一般読者に知らしめることも大切な仕事のうちではないでしょうか。■ところで本号は、3月に来日し、金沢や広島で講演会・朗読会を開き、聴衆に深い感銘を与えたユタ州出身のネイチャー

ライター、テリー・テンペスト・ウィリアムスさんの紹介文や記事がかなりの量を占めていて、さながらウィリアムス特集のごときものになっていますが、ASLE-Japanが他の文学研究会よりも刺激的なのは、他にもジョン・エルダー氏といい、現在活躍中の作家の訶に接する機会に恵まれていることではないでしょうか。いや、訶とは奥ゆかしい言葉ですが、いかにも弱々しすぎます。7月には若手のネイチャーライター、リック・バス氏が来日しますが、現在を生きるネイチャーライターの熱い息づかいを早く聞きたいものです。■本ニューズレターはマッキントッシュLC630上でPageMaker4.5を使って制作しています。会員諸氏の中で編集に興味のある方はご連絡下さい。編集作業のお手伝いを願えば有り難いのですが……(〇)



ASLE-Japan
文学・環境研究会

NO. 2

1995年6月1日発行

【発行】

ASLE-Japan / 文学・環境研究会
事務局 金沢大学教育学部英語研究室
野田 研一

〒920-11 金沢市角間町

Tel. 0762-64-5524 Fax. 0762-64-5616

【編集】

編集委員 大神田文二 / 石井 倫代
ニューズレター編集室

入会を希望なさる方々へ

ASLE-J/文学・環境研究会 (ASLE-Jはアズリー・ジェイもしくはアズリー・ジャパンと読んで下さい) ではネイチャーライティングに関心のある方々の入会を随時受け付けています。入会希望者は、下の「ASLE-J/文学・環境研究会 会則」を熟読の上、「ASLE-Japan入会申し込みカード」に必要事項を記入して、事務局宛にお送り下さい。会費の払込みはニューズレター同封の振替用紙をお願いします。なお、加入者欄には「ASLE-Japan/文学・環境研究会」と記入して下さい。

本研究会についてのお問い合わせも事務局で受け付けております。

ASLE-Japan/文学・環境研究会 会則

第1条 名称

本会の名称を「ASLE-Japan/文学・環境研究会」(The Association for the Study of Literature and Environment in Japan: ASLE-Japanと略称する)とする。

第2条 目的

本会の目的は文学における自然・環境に関する内外の研究・情報を交換・共有することである。この目的に沿った以下の活動を行うものとする。

- (1) 研究会および談話会等の開催
- (2) 会誌およびニューズレターの発行
- (3) 内外学会、研究会との交流

(4) その他必要と認められる事業

第3条 会員資格

第2条の主旨に賛同する者は会員になることができる。

第4条 会員の入会と退会

本会への入会と退会は事務局に申し込み、総会において決定する。

第5条 会費

本会の会費は年額3,000円とする。ただし、学生会員は年額2,000円とする。会計年度は4月1日より翌年3月31日とする。

附記：第6条から第10条までは省略しましたが、条項の内容をお知りになりたい方はASLE-Japan Newsletter No.1を参照するか、事務局にお問い合わせ下さい。なお、会則は1994年5月22日から施行されています。

キ リ ト リ セ ン

ASLE-Japan 入会申込カード[事務局用]		受付	年	月	日
氏 名	フリガナ				
住 所	〒				
電 話 番 号	() —	FAX	E-Mail		
勤 務 先		職 位			
所 在 地	〒	TEL	FAX		
専 門 領 域					
関 連 領 域 [著書・論文等]					

年 月 日

ASLE-J / 文学・環境研究会

事務局：金沢大学教育学部英語研究室

野田 研一

〒920-11 金沢市角間町

Tel. : 0762-64-5524 Fax : 0762-64-5616